

親鸞聖人（下）

一 郷正道

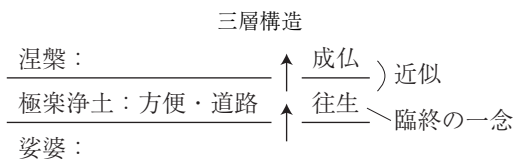
前稿で、浄土は死に対する不安と恐怖から解放されるための世界として存在し、平和な世界、俱会一處の場として經典に描写されている旨紹介しておいた。

その浄土の位置付け、構造は下のようになっていいる旨、聖人の文言から図示できる。

（Ⅰ）浄土の位置付け

願土にいたればすみやかに 無上涅槃を証してぞ
すなわち大悲をおこすなり これを回向と名づけたり

（天親和讃 聖典四九一、聖典全書二・四一三）



安樂仏國に生ずるは 畢竟成仏の道路にて

無上の方便なりければ 諸仏浄土をすすめけり

(曇鸞和讃 聖典四九三、聖典全書一・四二五)

涅槃と浄土は時間的に空間的に近似の関係ではあるが異なる境涯である。浄土は涅槃への方便、道路であると位置付けられている。そして、「成仏」という語は涅槃を証すことであり、「往生」は浄土へ生まれることである、というのが仏教の通軌である。さらに、注意すべきことは、行者は涅槃を証して成仏したら、直ちに大悲をおこすと明記されており、成仏したら完成でなく還相回向への廻入が必然とされていることである。

(2) 浄土往生

それでは、次に、浄土への往生は、(1) 現世において可能か、換言すれば浄土は現世において実現するのか、(2) 臨終の一念において可能か、換言すれば浄土は死後の世界なのか、という問題が生じて当然である。これについても聖人の文言に依って理解した

い。

① 「この身はいまはとしきわまりてそうらえば、さだめてさきだちて往生しそうらわ
んずれば、浄土にてかならずかならずまぢまいらせそうろうべし」

（末燈鈔十二 聖典六〇七、聖典全書一・七九五、八十八才）

② 「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの
土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまう
なり」

（歎異抄 第九条）

③ 「『浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいそ
うろうぞ』とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか」

（歎異抄 第十五条）

これらの文言に依るかぎり聖人が浄土を死後の世界と理解しておられたことは間違いな
い。また、前述した浄土の位置づけ、構造も証明されていると言えよう。

(3) 現生正定聚

ところで、浄土が死後の世界であることは文献上証明されたが、私自身の宗教感情としては現世での「救い」の実感が湧かないことを認めざるを得ない。聖人はかかる凡人の欲求にこたえるかのように、經典上の理解を変更して「現生正定聚」という考え方をお教え下さったように思えてならない。藤田師によれば、正定聚を彼土と見るか現生と見るか、どちらも可能とされる。しかし聖人はこの正定聚を彼土ではなく現生（現世）において得られるものと解しておられる、という。（藤田 四三五―四三六頁）

筆者が子供の頃は、「ご安心」という言葉をよく耳にした。ご安心を獲ることが真宗信者の目標とするところであったと愚考するが、最近は「ご安心」という表現を見聞することが少なくなっているように感じてならない。心を安んじてそこに命を立てるという意味の「安心立命」ということであろう。このご安心を獲ることこそ、現生正定聚に就くことではないか。そして、凡夫であつてみれば現生で正定聚に入ることをもってよしとする、と教示されたのが聖人の教えの結論ではなからうかと愚考する。

そもそも「正定聚」は、「正しくさとりを得るに定まったもがら」の意味で、原始經典に由来する用語とされる。そして、その正定聚はどこで得られるかといえれば命終後の浄土においてである（藤田 四三五頁）、とされる。浄土三部經においては、正定聚は死後の世界である極楽浄土において得られ、その状態は不退転の位とも称され、そこから涅槃へ成仏するのである（藤田 四三三頁）。ここに命終後浄土へ往生することは正定聚・不退転の位に就くことに他ならず、そこから涅槃へと成仏する、と經典では語られ、往生と成仏の関係が時間的、空間的に明示されている。法然上人も浄土往生と成仏を「当益」と理解されていたとのことである（藤田 四三三頁）。

ところが、浄土三部經、法然上人の理解と異なることを唱えたのが親鸞聖人であった。聖人は眞実信心を獲ることを条件に正定聚の位を未来の浄土から現生へと移行されたのである。これが聖人の画期的な業績であったといえよう。聖人の文言で確認しておこう。

眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに攝取して、すてたまわざるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめたりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを

往生をうとはのたまえるなり。…すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいに
さだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。

(一念多念文意 聖典五三五～五三六・聖典全書二・六六三～六六四 八五才)

眞実信心の行人は、撰取不捨のゆえに、正定聚のくらいに往す。このゆえに、臨終
まつことなし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。

(末燈鈔 聖典六〇〇、聖典全書二・七七七 八八才)

これらの文言から次の如き等式が成り立つ。

信心獲得Ⅱ入正定聚Ⅱ住不退転Ⅱ往生をうること…現世

正定聚に關しては次の文言にも注意すべきであろう。

前所引の『一念多念文意』の「正定聚のくらいにつきさだまるを往生をうとはのたまへ
るなり」の「正定聚のくらい」に対し「ワウジャウスベキミトサダマルナリ」という左
訓・解説をほどこしておられる。(定本親鸞聖人全集一二八・聖典全書二・六六三…大谷
派の聖典には何故かこの左訓が欠落している)

ここに、正定聚に入ることが、時間的に「往生をうる」という契機に先き立つこととして理解されていることがわかる。次の文言もこれを支持するであろう。

浄土へ往生するまでは、不退のくらいにておはしましさふらへば、正定聚のくらいとなづけておはしますことにて候なり。

信心のさだまるとまふすは、撰取にあづかるときにて候なり。そののちは正定聚のくらいにて、まことに浄土へうまるるまでは、候うべしとみえ候うなり。

（御済息集四聖典五九〇…聖典全書二・八六三、末燈抄二三 聖典全書二・七九六）

これらの文言からは次のような時間的経緯もはっきりする。

信心獲得（≡撰取不捨に与る）↓正定聚（不退転）↓浄土往生

くりかえしになるが以上の如く、聖人は、經典では未来の浄土に位置づけられていた正定聚に入ること、現世での事象とし、そこで往生すべき身と定まり、現世において浄土往生が保証されていることをもって、これこそが「往生極樂のみち」であり、凡夫の身と

してはそれで十分とされたのであろう。

(4) 信心について

ところで、入正定聚の条件として信心を獲ることがあげられていた。信心のさだまるのはアミダ仏の摂取にあずかるるとき、とのべられていた。それでは、信心獲得、信心がさだまるとはいかなることであろうか。どうしたら信心は獲られるのであろうか。

そもそも「信心」は「心清浄」ともいわれるが、それはいかなる意味であろうか。「大経」における仏教独自の用法として「信」を意味するその原語は、*prasāda* (浄信) と *adhimukti* (信解) とされる。前者、浄心は心が澄み切って浄らかとなり、静かな喜びや満足が成ぜられる境地、とされる。後者、信解は対象に対して明確に決定し了解し判断する心作用のことで、きわめて知性的な性格をもつ、とされる (藤田 四七六―四八二頁)。

『俱舍論』(大正二九、19b-23)でも「信者令心澄浄」(心を澄浄にすること)と定義されている。

従って、仏教、浄土教における「信」は静寂で知的な心のあり方といえよう。そこで、

目下課題とする「信心」を「知的な澄んだ心」と理解しておく。

それでは、この「知的な澄んだ心」を獲ることは可能であろうか。八十五才の聖人が次のように告白する凡夫には不可能なことではなからうか。

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

（一念多念文意 聖典五四五、聖典全書二・六七六）

「かかるあさましきわれら」の現実存在はいかなるものかといえは、山口益師は次のように述べる。

われわれが我であるとする主体的側面が、我が物とする客観的側面の上にはたらしかけて、「我れ」があるとなし、「我れ」が我が物を所有するという風に、「我れ」を固執し「我が物」を固執してゆく。この我執、我所執という固執のあり方で、愛憎違順

して行く。

『大乘としての浄土』三〇—三一頁の取意

本質的に我執・我所執を止められず愛憎違順をくり返すわれらは、「知的な澄んだ心」など獲得できるはずはないと気付かずにおれない。ということは、私が信心を獲得する、という思考の誤りを即刻改めねばならないということであろう。その点を山口師は次のように語っておられる。

信心清浄というのは、久遠劫よりこの世までその我執我所執の心に迷う人間の苦悩を救わなければならぬという如来の本願の等流せるものであるけれども、そのような信心清浄ということは、無始以来我執我所執に沈淪してきた凡夫の思慮の前においては考えてもみることのなかつたものである。

だから親鸞も「遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」という他はない出来事である。そのはからずも出遭うことのできたその慶び驚きの念を一念の信というのである。心からそのような信心は我がものとすることのできない、そういうものとして表される他は

ない。それが信楽空法の信心でなくてはならないであろう。

（幡谷『共生の大地』九一—九二頁）

かくして、幡谷師の文言を借用すれば信心は私が発す、私が獲得するものではなく、如来からの賜りものであった、仏力によって与えられるものであったと理解せねばならない。

では、この点を經典の文言——浄土真宗の教えのエッセンスを語る——によって確かめておきたい。

『無量寿経』の中に、あるいは「諸有衆生 聞其名号 信心欢喜 乃至一念 至心 回向 願生彼国 即得往生 住不退転」と、ときたまえり。∴「聞其名号」というのは、本願の名号をきくとたまえるなり。きくというは、本願をききてうたがうころなきを「聞」というなり。また、きくというは信心をあらわす御のりなり。「信心 欢喜 乃至一念」というは、信心は如来の御ちかいをききて、うたがうころのなきなり。「欢喜」というは、「歡」は、みをよるこぼしむるなり。「喜」は、こころによ

ろこばしむるなり。うべきことをえてんずと、かねてさきよりよろこぶこころなり。…「一念」というは、信心をうるときのみわまりをあらわすことばなり。「至心回向」というは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり、「願生彼国」というは、「願生」は、よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。「彼国」は、かのくにという。安楽国をおしえたまえるなり。「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに攝取して、すてたまわざるなり。「摂」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

（一念多念文意 聖典五三四—五三五…聖典全書二・六六一—六六三）

この文章は、聖人が「無量寿経下巻」の本願成就文（聖典四四、七一〇）を解説した

ものである。この文言から「信心」についての聖人の理解を抽出すれば次の如くまとめられる。

- 1 信心は聞名によってえられる。
- 2 信心は如来の御ちかい（本願）を聞いて疑わない心。
- 3 信心は歓喜をとまなうもの。
- 4 信心をうるということは阿弥陀仏の摂取不捨に与ったときの一瞬に凝縮される。
- 5 信心をうれば阿弥陀仏の摂取に与り、正定聚に就き、往生をうることになる。

つまり信心をうるということは人間の分別の介在を許さない心事である。

（山口『大乘としての浄土』五八頁）

さらに、聖人にとっての「信心」の定義ともいうべき文言を挙げておこう。

「信楽」はすなわちこれ真実誠満の心なり、極成用重の心なり、審験宣忠の心なり、欲願愛悦の心なり、歓喜賀慶の心なるがゆえに、疑蓋雜わることなきなり。

因みにここに見られる「信」についての五項目の内容を「浄土真宗聖典 第二版」二三〇頁の解説を借用して挙げておく。

- 1 真実誠満の心…仏の真実が満入している心。
- 2 極成用重の心…完成（至極成就）された本願のはたらき（用）を敬い、尊重する心。
- 3 審験宣忠の心…つまびらかに明言（審験）された如来の仰せ（宣）を偽りなく（忠）信じる心
- 4 欲願愛悦の心…浄土往住の願いを満たされて愛で悦ぶ心。
- 5 歓喜慶賀の心…往生の決定したことをよろこび、聞き得た法をよろこぶ心。

（5）念仏について

次の問題は、なぜ聞名、称名念仏によって、入正定聚、住不退転、往生をうる事が可

能となるのであろうか。文献には次のように語られている。

南無阿弥陀仏を称ずれば、…命終の時に…すなわち極楽世界に往生することを得ん。

（仏説観無量寿経 下品下生、聖典二二二…聖典全書一・九七）

一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住座臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆえなり

（観経疏 散善義 聖典全書一・七六七）

おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり。…親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

（歎異抄 第二条）

これらの文言により、極樂往生が称名念仏によるものであることは明白である。しかもそれが仏の願に順ずるものであるからである。その願が第十八願を指していることはいうまでもない。

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法

(たとい我、仏を得んに、十方の衆生よ、心を至し信樂して、我が国に生まれたいと欲して、乃至十念しなさい。もし生ぜずは正覺を取らじ。唯、五逆と正法誹謗とを除く)

この第十八願の要点はこういうことであろう。我が国(極樂浄土)に生まれたいと欲して十遍でもいいから念仏しなさい、と私に呼びかけていて下さる。念仏するものは浄土に至るのであって、そうならないことには、自分、法蔵菩薩は成仏できない、と我々が極樂浄土へ往生することを願ひ、誓っていて下さるわけである。このような、仏の願、誓ひに順じて念仏することが、浄土往生への正しく定まった行為だというのである。

そこで、南無阿弥陀仏の意味を確認しておきたい。漢訳「南無阿弥陀仏」は二つの梵語原文 *namo'mitābhāya, namo'mitāyuse* の音写であって、原文にある「光 *ābha*」「寿 *āyus*」の言葉がはぶかれている。しかし、梵語を勉強されたとは思えない親鸞聖人は「正信偈」で、「南無不可思議光」「帰命無量寿如来」と訳され「光」と「寿」を入れておられる。因みに、原文の *namas* の原意は「頭を下げる、お辞儀する」で、音写すれば「南無」であり意識すれば「帰命」であって両者とも意味は同じである。原語 *anita* は「阿弥陀」と音写され、「無量」「不可思議」（思議することはできない）を意味する。従って阿弥陀仏とは「無量の仏」ということであり、内容的には「無量の光（≡智慧）と無量の寿（≡慈悲）をもつ仏」という意味である。従って、私たちが日常「南無阿弥陀仏」と称えているのは、「（私は）無量・不可思議の（光・寿命をもつ）仏に帰命します」と称えているのである。しかし、これでは前述の信心獲得、入正定聚・住不退転、往生を獲ることという真宗教義の要旨を説明しきれない。

親鸞聖人の「南無阿弥陀仏」についての独創的ともいえる解釈を理解せねばならない（幡谷『大乘至極の真宗』二二八頁、一四〇頁）。聖人の解釈を図示すれば次のようになる。

「阿弥陀仏に南無（帰命）しなさい。
阿弥陀仏に南無（帰命）します。」

と念仏は二通りの内容をもっていると理解されたのである。前者はよびかけ（本願勅命）であり、後者はそれへの応答である。前者は仏からの覚他のはたらき（覚行）であり、後者は私の自覚である。前者は還相であり後者は往相を意味する。因みに、「仏」とは、伝統的に「自覚覚他覚行窮満」（観経疏 玄義分 聖典全書一・六五八）と定義されている。したがって、聖人は、六字の念仏に、仏の覚他のはたらき、即ち願（誓い）と行を見出されていることになる。こうして念仏は「順彼仏願」といえることになる。

この、仏の覚他の行が、我々の上に信心として成就するのである。であればこそ、信心は私が発すようなものではなく、全くの賜りものでしかないわけである。念仏を称えるのも仏からのよびかけによって私が念仏するとはいうものの、それも仏のはたらきのしからしむるところのものである。その信心に偶々触れることができれば自ずと正定聚に入ることができ往生をうることになるわけである。その信心をうたがってはならないのである。

以上の如く、親鸞聖人の教えは、私のような凡夫に仏が私を救ってやるという真実心が

入つてきて、すなわち、信心を賜ることによつて現生正定聚につくことができ、浄土往生を保証し、死に対する不安と恐怖から解放し、ご安心を与えることを教えるものであったと言えよう。しかもその信心の動向はすべて阿弥陀仏の本願のしからしむるものであつて、正に絶対他力のあり方でしかなかつた。南無阿弥陀仏と称える念仏は私をして浄土への往生をよびかけるはたらきであり、死に対する不安と恐怖から解放させんとする慈悲そのものであつた。従つて私のなすべきことは、そのよびかけ、はたらきを疑うことなく、それに護られて毎日の生活を臨終の一念に至るまで歩まさせていただくことに尽きるといえよう。死後の生活が保証されることによつて、現世での生活を安心と感謝の気持で全うすれば良し、ということになるのである。そのように理論的に理解できたつもりでも、浄土へ急ぎ往きたいとも思わず不安に苛まれ、不満に満ちた生活しかできないのは、正に煩惱の所為ということであろうか。

以上の如き拙い聖人理解をともかく文章化し私的に納得しているのは、幡谷師の次の二著との遭遇がすべてであつて、万感の感謝の意を表し擱筆することにする。

『共生の大地』 自照社出版 二〇一七年

参考文献

- 聖典Ⅱ『眞宗聖典』 東本願寺出版部 一九七八年
聖典全書Ⅱ『浄土眞宗聖典全書』 本願寺出版社 二〇一三年
藤田Ⅱ藤田宏達『浄土三部経の研究』 岩波書店 二〇〇七年
山口Ⅱ山口益『大乘としての浄土』 理想社 昭和三十八年